

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00463

研究課題名（和文）State-of-the-Nation Playsと1970年代英国演劇

研究課題名（英文）State-of-the-Nation Plays and British Theatre in the 1970s

研究代表者

川島 健（Kawashima, Takeshi）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：60409729

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1970年代のイギリスで制作されたState-of-the-Nation Play（以下SNPと略）と通称される劇作を対象としている。この概念が用いられた文脈を再構築し、これらの劇作が訴えた問題を検討した。これら劇作と、1950年代以降の「怒れる若者たち」の作品との差異を明らかにして、SNPは社会主義への幻滅が背景にあることが分かった。同時期に興隆するフェミニズム演劇や同性愛者たちのマイノリティ演劇は、自分たちの権利の拡大に注力していく。それにたいしてSNPは、様々な権利と利権を調整するためのプラットフォームの構築を目指し、歴史的な視座を求める特徴を有していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

SNPは、社会主義の言説の行き詰まりを背景にしている。それは、経済的な繁栄がもはや望めない時代に、新たな連帯の構築と公共圏の創出を目指したものであった。SNPは歴史の再構築に向かう。脱工業化社会のビジョンを歴史的遡行の果てにみいだそうという企図がそこには隠れている。SNPの研究は、日本はおろかイギリスでもまだ少ない。2020年代は、コミュニティが細分化され、批評がクラスター化してしまった。異なる意見を共存させ議論させるようなプラットフォームの構築が望まれる現状に、SNPをめぐる洞察はヒントを与えてくれる。

研究成果の概要（英文）：This research examines works commonly referred to as State-of-the-Nation plays (hereafter abbreviated as SNP) produced in the United Kingdom in the 1970s. Its aim is to reconstruct the context in which the term was used and examine the issues addressed by these plays. A focus on the differences with Angry Young Man's work from the late 1950s onwards reveals that the SNP were the result of a deep disillusionment with socialism and left-wing discourse. Feminist performance and gay minority performance, which flourished at the same time, had as their focus the extension of the rights of minorities. In contrast, the SNP proved to be characterised by its tendency to restructure history in order to create a platform for coordinating various rights and interests.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス 演劇 1970年代 State-of-the-Nation Play コンセンサス政治 ジェンダー アイデンティティ・ポリティクス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

State-of-the-Nation Play (以下 SNP と略) は、批評家 Michael Billington が、壮大な視座を持つ Howard Brenton の *The Churchill Play* (1974) の特徴を際立たせるためにつけた呼称である。以後その言葉はイギリスの戦後演劇を語る際のキーワードとなったが、その定義が検討されたことも範疇が確定されたことはほとんどない。Billington 自身が発表した大著 *State of the Nation: British Theatre since 1945* (2007) でも明確な定義はされていない。この本のなかで Billington は、戦後まもなく発表された J. B. Priestley の *An Inspector Call* (1945) を SNP の先駆的な劇作と評価する。また 2000 年以降に上演された劇作をこの概念で解釈する批評家も多い。その結果、この言葉が持っていた批評的な射程が見失われ、大きな視座を持つ作品を緩く囲うナンデモ理論になってしまった現状は残念だ。

2. 研究の目的

SNP は、1970 年代のイギリスの社会主義、左翼思想の混沌から生まれ、リベラリズムが演劇において生き延びるための苦闘を名付けたものだ。また、SNP は大規模なキャストと舞台装置を必要とする場合が多く、そのために多大な資金、助成金が前提となる。SNP は社会主義への諦めと、アーツカウンシルの舞台芸術政策が出会い、生まれた芸術形式なのだ。本研究は、劇作家たちが SNP のような作品を執筆し、制作するようになった経緯と、劇作が照らし出す問題を精査する。それにより、この時代の混乱にたいして、舞台芸術に期待された役割を詳らかにすることができる。

1970 年代は社会主義や左翼思想が細分化した時代だ。インフレが進み、経済不況が深まったこの時代、労働党と労働組合との蜜月関係が終わる。アーツカウンシルが舞台芸術に割くための予算がはじめて減少したのは 1970 年代半ばだ。先鋭的なアナーキズムが社会を動揺させる事件が頻発するのもこの時代だ。1970 年代前半は、極左テロリスト集団 *The Angry Brigade* の活動が盛んになる。銀行や大使館に爆弾を仕掛け、富豪や政治家など要人の暗殺を目論んだ。1967 年に結成された極右ファシズムの *The National Front* の活動が顕著になるのは 1970 年代である。

スウィング・ロンドンを推進した若者文化は後退し、社会主義と左翼思想が明確なターゲットを失ってしまった 1970 年代は、リベラルとラディカルを旗印に戦後イギリス演劇を牽引してきた先駆者たちが牽引力を失っていく時代だ。それに代わるように登場したのが、David Hare, Howard Brenton, David Edgar, Trevor Griffiths らである。かれらは歴史を遡り、イギリスという国家の起源とその輪郭の変遷を辿る壮大な視座を特徴とする劇作を執筆、制作する。このような劇作が SNP と呼ばれた。これら劇作に込められた意図と、それにたいする反応を吟味することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究はまず、SNP の定義の明確化と範疇の限定を試みる。SNP という言葉が用いられた文脈を再構築し、これに概括される劇作が訴えた問題の輪郭を明確にする。様々な研究者、批評家がこの用語をどのように定義し、使っているか、この言葉がなにを内包し、なにを内包しないのか明確にし、その概念の輪郭を鮮明にする。SNP の概念を明確にすることで、戦後イギリス演劇を巨視的にみるための視座を確定する。

第二に、SNP に含まれる劇作の特徴を考察する。先述したように、歴史を遡り、国家の起源と変遷を物語る叙事劇が SNP の特徴であるが、時系列的な構造を持たない。ふたつ以上の時間軸が交差したり (*Howard Brenton. The Churchill Play. The Romans in Briton*)、過去が幻視され現在を攪乱したり (*David Hare. Plenty*)、歴史の実験的な再構築が SNP を特徴づける。このような実験性の根拠と効果を討究することが必要となる。

第三に、同時代の演劇活動との比較をし、SNP のメッセージと方法論を際立たせる。1970 年代は、フェミニズム演劇や同性愛者たちのマイノリティ演劇が興隆した時代でもある。これらの演劇は、自分たちの権利の拡大に注力するために、観客を煽情するアジプロ的手法に訴えることが多い。そもそもアジプロは 1920 年代から 30 年代、労働者演劇の手法であった。労働者の関心を喚起し、労働問題に向けさせるための方法であった。1970 年代はこの手法がマイノリティ演劇に転用されたのだ。実は、SNP の劇作を執筆する David Hare, Howard Brenton, David Edgar らは、そのキャリアの初めにアジプロの脚本を書いていた。かれらがアジプロ演劇を諦め、SNP のな構成に辿り着いた経緯を調査する。

4. 研究成果

研究成果は多岐に渡るが、ここでは以下の 3 点を紹介する。

(1) 思想的背景

SNP の劇作家たちが、社会主義、左翼思想の言説が行き詰まりを経験していることが分かっ

た。David Hare, Howard Brenton, David Edgar, Trevor Griffiths らはみな、インタビュー等で、1968年のパリ五月革命へに期待が早急に萎んでしまったことを吐露している。また同時期に、かれらは、アジプロの煽情的手法に頼るマイノリティたちの演劇が、むしろ分断を生み、拡大してしまう懸念を抱くことになる。

1960年代後半から、オルタナティブな劇団が増え、特にフェミニズムや同性愛などのアイデンティティ・ポリティックスと結びつく。都市部にあり、多くの観客を収容できる大劇場での上演をメインにする劇団とは対照的に、オルタナティブな劇団は、中心から離れたところに位置する、小さな劇場を公演の場を選ぶ。そのためにフリンジ・シアターとも総称されるこの演劇活動は、Women's Theatre Group や Gay Sweatshop など、先駆的な劇団をうむことになる。アジプロはこのようなマイノリティ演劇の劇団の活動と親和性が高い。

SNP は、特定の階級、階層、アイデンティティへの肩入れではなく、歴史的な視座から、政治的混乱と社会の断絶の原因を探求する。それは、様々な議論が成立するための基盤条件を整備するための試みだ。したがってアクチュアルな問題にたいする直接的な回答を提示することはない。それらの作品が、経済的困窮や不平等に苦しめられるものたちから目を背けているようにみえるのは確かだ。しかし、SNP は、工業化社会からの脱却を目指す、過度期のイギリスにおいて、多様な主張が排斥しあうことなく共存するための、演劇の模索と考えるべきである。

また、上記の劇作家たちが60年代はラディカルな左翼、アナーキストであったことも銘記しておくべきだ。そのような主張を持つ劇作家たちが、国家の輪郭の変遷を辿り、歴史を遡行する劇作を執筆するようになるのは意外にみえる。というのも、国家の起源の探求は保守的な心性と親和性が高いからだ。しかし SNP は歴史を無数の切断面を持ち、不連続な進展として描く傾向がある。そしてそのような不連続の堆積のうえに現在を同定する。

(2) フリンジからメインに

David Hare, Howard Brenton, David Edgar がもともとはアジプロ演劇に親しみ、オルタナティブ、あるいはフリンジと呼ばれる活動に従事していたことは上記した通りだ。かれらが五月革命に失望し、社会主義や左翼言説を諦めたことと、アジプロ的な手法に見切りをつけことは軌を一にしている。これらの劇作家たちは1970年前後から、歴史を遡る、壮大なスケールの叙事劇の創作に向かう。しかし、その転回と成果は、かれらの独創性のみに原因を求めることはできない。大掛かりなキャストを擁する劇は、大きな舞台上で上演される必要があり、大道具や音響、照明もそれなりのものが要求される。このような公演を可能にしたのは、ふたつの国立劇団、ナショナル・シアター（以下 NT と略）とロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（以下 RSC と略）と、アーツカウンシルからの潤沢な資金の投下であった。

SNP は、かつてはオルタナティブ／フリンジな場で活躍していた劇作家たちをメインストリームに巻き込むきっかけを作った。1970年代以降、上記の作家たちは大きな舞台を前提に創作することになる。オルタナティブな活動で培われた劇作家が、メインストリームでも受け入れられていくようになったのがこの時代なのだ。そもそも戦後以降のイギリス演劇界を支えてきたのは左翼、ラディカルな考えの演劇人たちであったが、SNP により、傍流から主流に参与する流れができ、演劇界の左翼陣営を攪拌することになる。もはや、左翼あるいはラディカルがなにを参照するのか、曖昧になった。

(3) 暫定的定義の提案

様々な批評家、研究者の SNP という言葉の使用と、それが参照する作品を読み解き、分析した結果、以下の要素を併せ持つものを、SNP と呼ぶに相応しいと暫定的に結論する。

- ① 社会主義への幻滅
- ② 叙事的なパースペクティブ
- ③ 大規模なキャスト
- ④ 大きな劇場での上演
- ⑤ 公的資金の投入

これらはそれぞれ、SNP の次の要素をカバーするものである。SNP が生まれた思想的コンテクスト①、作品の内容と構成②、その公演を可能にするハード面の条件③④⑤。SNP は1970年代に作られた用語であるが、上記の定義を満たしていればそれ以外の期間に制作されたものも、SNP に含むことができるであろう。

(4) ストライキと訴訟

1970年代のイギリス演劇は、社会的に大きな話題を提供することになる。とくにそれは SNP の公演とかかわっている。多くの例があるのだが、ここではふたつの事例を紹介する。

① John Arden と Margaretta D'Arcy 共作の *The Island of the Mighty* (1972) はアーサー王伝説をもとにイギリスの起源を、インドの舞踊を交えて描く壮大な構成をもった劇作であり、SNP のひとつと評価しうるものだ。*The Island of the Mighty* は RSC によって上演されることになっていたが、リハーサル中に脚本が書き換えられたとして、作家たち自身が劇場のそとでピケを張り、リハーサルのストライキを訴える騒動になる。結局は上演されるのだが、劇作家たちと、演出家と劇団側の軋轢は、ラディカルの意味の食い違いを明らかにする。前者が求めたのは労働者としての作家の権利であり、その主張は労働争議の一部であったが、RSC 側にはそれに対峙するロジックがなかった。RSC は初代芸術監督 Peter Hall と次代芸術監督の Trevor Nunn とともにラディカルな知性を公言していたが、そのような芸術的スタンスと労働者の権利を損なう危険があることまで配慮ができていなかった。

② 1980 年、Howard Brenton の *The Romans in Britain* が NT で上演された。これはローマ人のブリトンへの侵略と、1970 年代後半のイギリスの北アイルランドへの関与を交錯させる複雑な構成を持った叙事劇であった。そのなかで男性の同性愛強姦の場面がスキャンダルとなる。保守的なキリスト教団体に属し、1964 年設立の圧力団体「クリーンアップ TV」キャンペーンの主要メンバーであった Mary Whitehouse は、テレビから性、暴力など有害で冒瀆的と目される表現の一掃を訴えていた。彼女は、*The Romans in Britain* の公演をめぐりその演出家 Michael Bogdanov を私人告訴したのだ。Whitehouse の告訴は、アーツカウンシルの助成金が投入された国立劇場の上演で、そのような表現が相応しいのか問うものであった。FRINGE での上演であれば許されていたであろう表現が、メインストリームの舞台であるがゆえに告訴されたとも考えられる。

①と②はともに、左翼、社会主義的傾向を持つ劇作家たちの劇作が、公共性の高い場所、条件で上演されたとき、必然的に発生した問題といえる。①は演劇界の創作環境と、労働者としての創作者の主張の齟齬により発生した。また②は、それまでは看過されていたような過激な表現が、公共性の高い空間で衆目の目に晒されたときに起こったものだ。これらはともに、文化、芸術面でのラディカルと労働者の権利の矛盾を露見させる事件であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川島健	4. 巻 83
2. 論文標題 「ウェールズ炭鉱のラジオドラマ リチャード・ヒューズの「危険」とBBCの英語文化ヘゲモニー」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『主流』	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Kawashima	4. 巻 -
2. 論文標題 "Miners, Wales and the BBC Radio Drama: Richard Hughes's Danger"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Radio & Audio Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/19376529.2022.2046584	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島健	4. 巻 第81巻
2. 論文標題 「ブリストリーのイングランド」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『主流』	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川島健	4. 巻 第12巻
2. 論文標題 「J・B・ブリストリーの「ポストスクリプツ」 戦時ラジオ放送とビクトリア朝文学」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『早稲田大学高等研究所紀』	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川島健	4. 巻 105
2. 論文標題 「再構築された「ストーリー」 『夜の来訪者』と連帯の可能性」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『同志社大学英語英文学研究』	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 川島健
2. 発表標題 「J・B・プリーストーリーの「ポストスクリプツ」 戦時ラジオ放送とビクトリア文学」
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第14回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川島健	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 346
3. 書名 『英国若者文学論 国家が拡張をあきらめたとき、若者はどのように大人になっていくのか』	

1. 著者名 Takeshi Kawashima	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Land	5. 総ページ数 342
3. 書名 ‘Experienc’ d Age knows what for Youth is fit’? Generational and Familial Conflict in British and Irish Drama and Theatre (担当箇所 John Osborne’s Look Back in Anger and Generational Discontinuity)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------